

“悪”はどのように在るのか

ー主体・客体の観点を中心にー

長谷 雄太

1. はじめに

我々は、日々様々な“悪”と出逢っている。インターネットやニュースで目にする犯罪のような悪に馴染みがない人は多いかもしれないが、ちょっとした疚しいことや罪悪感などの“悪い”ことも含めると、悪に関わりのない人間は存在しないように思われる。心理臨床の領域でも、悪との関わりついて苦悩を抱える人は多く、巨大な悪に苛まれている感覚を味わっていたり、“自分が悪いのでは？”という思いに苦しんでいたりする。しかし悪は同時に、何とも言えない魅力を持つものでもある。このように悪は、心理臨床に携わっていく中で避けることのできない重要な概念であるが、非常に多義的なものであり、その全容を掴むのが難しい。

善と悪は、人間だけがもつ概念ではなく、動物の世界にも本能的な次元で根ざしている。それは、快―不快の感覚から生じるもので、快を与えるものや心地よいものは善、自分を攻撃するものや天敵、毒をもつものなどは悪というように、単純な二分法から始まる。しかし人間の場合それだけではなく、道徳や倫理などの様々なものが絡み合うことで、善悪の問題をより複雑にしている。Jung(1958/1989)は、「善および悪は私たちの倫理的判断の『原理』ですが、究極的な存在の根本にまで遡ると、それは『始源』であり、神の御姿であり、神の御名です」としている。つまりここで悪とは、ヌミノースな性質を持ち、それ自体を根本的に理解することができるのは神のみであるとされている。また同時に、Jungは「善または悪について語っているとき、それはある人がそう名づけたもの、あるいはその人がそう感じたものについて語っている」とし、悪について語られるとき、客観的な事柄が内主観的なイメージによって置き換えられているとしている。実際、我々が善悪について語るとき、その判断の多くが主観的なものである。よくある創作物の中でも、ヒーローは自分がしていることを善だと信じてヴィランと戦うが、そのヴィランにとっては自分のしていることが善で、ヒーローは悪の存在である。ナチズムでさえ、その当事者達は自分たちの行う残虐な行為にある種の正当性を感じていたのではなかろうか。また、直接的な暴力性に伴う善悪判断のみならず、文化においても悪の所在は変わってくる。日本では当たり前のように牛を食べるが、ヒンディー教の教義において牛は神聖な生き物であり、牛を食べることは罪となる。このような文化差による悪の所在の変化は、ある種人間独特のもので、人間にとって悪という存在の移ろいやすさや、我々がいかに悪というものの本質を曖昧なままに把握しているかということを示しているとも考えられる。本論では、悪について宗教や哲学を参考にしつつ、臨床心理学の理論を辿りながら検討していきたい。

2. 客体としての悪

(1) 宗教における悪

Jung は、悪の本質的理解の多くを神に委ねているが、「神」の視点を意識する宗教ではどのように悪が捉えられているのか。人間の持つ悪についての宗教的な事柄で、代表的なものとして原罪の概念が挙げられる。旧約聖書においてアダムとイヴは、エデンの園にある善悪の知識の木の実を、悪魔の象徴ともされる蛇にそそのかされて食すことになる。その結果アダムとイヴは、純粹無垢では無くなり、怒りや嫉妬のような負の感情も兼ね備えるようになる。神は2人をエデンの園から追放し、出産や労働など生きていく上での苦しみを背負わせる。この人間が、生まれながらにして持つ、苦しみのもととなる罪を原罪と呼ぶ。中国思想において荀子が性悪説を唱えたように、人間は元来原罪のような悪の要素を色濃くもつ存在という思想は世界中に多くみられる。一方、特に中世の神学の領域では、いわゆる悪の状態を“善の欠如”として捉え、そもそも悪の存在を否定する。アウグスティヌスは、いわゆる悪の状態が善の欠如であって、本来神による不変的な善を、可変的な善へと改変しようとする自由意思から生じるものだと考えた。このような思想の中では、悪である状態から抜け出て善に向かうことが大きなテーマとなっている。そして神は絶対的な善性を持ち、悪は悪魔などの象徴される神よりも下位の存在として語られる。しかし、多神教では悪の捉え方が異なる。例えばゾロアスター教では、善神アフラ・マズダーと悪神アンラ・マンユの対立を描く、善悪二元論的な思想が中心となる。ここでは、善神と悪神が同等の立場として扱われており、悪も善と同様の絶対性を持つ者として考えられている。また、インド神話や仏教に登場する夜叉は、人を喰らう悪の象徴としての側面がある一方で、仏法を保護する善神としても有名である。このように、悪神では有害な側面と表裏一体となった肯定的な役割が想定されているものが多く見られる。

こうした宗教の悪に対する功績の1つとしては、様々な観点から悪を規定し、客体化してきたことが挙げられる。そういった意味で、現代の法律と宗教の悪に対する姿勢は通ずる部分がある。ユダヤ教やキリスト教の中では、善悪を神の視点から規定することで、人間の持つ特定の性質を悪として客体化している。そうして認識として客体化された悪は、さらに悪魔のような存在として象徴化される。多神教では、悪は神の姿をとって現れることもある。客体化することによって、我々はそのことについて思考し、理解していくことが可能となる。Jung が言うような「神のみぞ知る悪」は茫漠とした原理的なもので、我々人間が示す悪の範疇に収まりきるものではない。宗教は人間の持つ性質や、周囲の事象を悪という客体にまとめることで、主体から切り離した、それ自体が主体を持ったものとして認識し、関係性の中で捉えることで人間存在を考察しているとも言える。Spinoza(1677/1951)も「悪が悪とされるのは、ある様態の観点だけからであり、我々は人間として、悪とはなにかをただ人間の観点から決めるに過ぎない」としている。つまり、我々が用いる善悪の概念は快—不快の感覚から生じる本能的な次元のものに留まらず、人間固有の視点から生み出されたものを多分に含んでいると考えられる。ここで問題となってくるのは、一体何が悪として客体化されているのかということである。

(2) 悪の要素

中村(1994)は、Ricoeur, P.の穢れや罪および罪責に着目した悪に対する考察を参考にして、

『〈悪〉のトポイ・カタログ』を作成している。それは5段階からなり、(1)さかしま・捻じれ・カオス、(2)きたなさ・穢れ・醜さ、(3)妖怪・悪鬼・悪魔・毒物・病原菌・毒虫、(4)暴力・権力・破壊・侵犯・残酷・不正・犯罪・差別・裏切り・嘘・憎しみ、(5)痛み・苦しみ・病・ガン・エイズ、から構成される。中村は、これらに共通する悪の本質的な作用として、関係の解体があるとする。関係の解体とは、「一般に〈善〉とは、自然の一部としての我々の活動力を増大するとともに、われわれのうちに秩序を形作ることであり、また反対に〈悪〉とは、自然の一部としてのわれわれの活動力を減少させるとともに、われわれのうちの秩序だった関係を解体し破壊させるものである」という、Spinoza(1677/1951)の論を基にした概念である。中村は関係の解体の概念について、毒物のような身体的な破壊にとどまらず、殺人も「自分たちと原理的に一致している同類の体を侵犯し、われわれの生存がそれに則る基本的な関係を破壊する」ものと捉えられるとし、基本的で普遍的な悪を一挙に説明できる、明快な原理であるとしている。ここでの関係や秩序に対する破壊性は、快―不快の次元から身体的に主体を破壊し得る次元のものまで含むものとして考えられる。このように哲学や倫理学の領域では、悪の性質や内容が多く議論されてきたが、悪という客体が生じる背景には共通して、秩序や関係に対する破壊性が潜んでいる。そして、関係に対する破壊性が人間にとって思考・認識の対象となったとき、悪が生じ得る。ただ、この破壊性はそれ自体が即ち悪と呼べるわけではない。夜叉がその破壊性を、仏法を守るために駆使して善神となるように、破壊性自体は悪に留まらず、善にもなり得る多義性を持ち合わせていると考えられる。

悪と破壊性の不可分な関係について述べたが、本論では人間に内在する破壊性の問題と、実際に犯罪や非行に至ることを区別して考えていく。Winnicott(1956/2005)は、犯罪や非行のように実際に反社会的行為を行ってしまうことは、組織化された反社会的防衛であるとしている。さらに、二次的利得や社会的反応を多分に含んでおり、その本質が見えにくいため、反社会的な傾向とは区別して考える必要性を論じている。実際、内的な破壊性は誰しもが備えている性質であり、それはスペクトラムを形成していると考えられる。しかし、実際の破壊行動となるとその場における外的な要因も入り混じり、同じスペクトラム上で検討していくことは難しい。また同様に、戦争やいじめなどの集団における破壊性も、その時の社会情勢や集団意思などの影響が強く、個々の心的な破壊性と同列に検討していくことは難しい。よって本論では破壊性について、集団における破壊性や犯罪・非行を除いた、誰もがもつ内的な破壊性に限ったものとして検討していく。

(3)精神分析理論における破壊性と悪の関連

では、なぜ破壊性は悪として客体化される必要があるのかについて、精神分析の理論を参照して検討していきたい。我々は、誰もが内面に多かれ少なかれ破壊性を秘めているものである。Freudは、『快感原則の彼岸』(1920/2006)で、生の本能と死の本能という力を人間は備えており、その相反する2つの力がせめぎ合ったり、協働したりすることによって、人間のあらゆる行動が生じると仮定した。ここでFreudは、死の本能について、生命誕生以前の無機物であった状態に自己を回帰させていくような静かな流れとして表現していた。しかし、Kleinはその理論をさらに発展させ、より荒々しい破壊性を伴うものとして死の本能を理論の中に組み込んでいっ

た。まず、この Klein の理論を基に、破壊性と悪の関係について辿っていく。赤ん坊の未発達な内的世界にも、生の本能と死の本能は渦巻いており、死の本能が優勢になると赤ん坊は自己が完全に破壊されてしまうような強烈な破滅不安を体験する。その破滅不安から逃れるために、生の本能に満ちた自己部分と、死の本能の破壊性に満ちた自己部分を分割していく。しかし、このままでは自己は破壊性に隣接した状態であり、完全に破滅不安から逃れられてはいないため、その破滅に満ちた自己部分を他者に投影し、悪い破滅的な対象を作り上げる。このとき、破滅不安を招く破壊性は初めて客体として扱えるようになり、その客体こそが原初的な悪であると言えるだろう。この悪に対して、破壊性を向け、悪の破壊性と相殺することで、赤ん坊は死の本能の破壊性から逃れられる。この状態は妄想分裂ポジションと言われ、この段階では赤ん坊は外的世界にしか悪を作ることができず、主に母親の乳房などが悪として機能している。しかし、赤ん坊はいずれ破壊性を向けてきた乳房は栄養を与え、自分を生かしてくれる良い乳房でもあることに気づき、その良い乳房に向けられた破壊性を自分も有していることを知る。この状態は内省機能を持った抑うつポジションとされ、このとき赤ん坊はこれまで外的世界にしか存在しなかった悪を内界に定位する。つまり、ここで自己の内的世界に悪を感じる、罪悪感が生じる。これは、これまで制御不能で捉えられなかった内的世界の破壊性を、悪という客体に押し込むことで認識可能にする作用とも考えられる。悪として客体化することは、主体と破壊性との間に距離を取ることにともながり、自身の破壊性をむき出しにせず、他者との関係性を維持するために必要なプロセスである。

ここまで、対象関係論に基づいて内的な破壊性から、悪が生まれるプロセスをまとめてきた。ここで、悪にはそのままでは手に負えない本能的な破壊性を、認識の対象として扱うことができるようにする機能が見られた。また同時に悪は、破壊性の矛先となる、一種の避雷針のような役割を果たしているとも考えられる。当然ではあるが、我々人間は“悪い”と認識された対象には様々な形で破壊性を向ける。悪に破壊性を向けることは、それ自体が破壊性を持つ悪から主体を守ることに繋がる。そのため、“悪い”ものであれば破壊しても構わない、という合理化が働きやすく、そうすることで破壊性を自らの身に引き受けなくても済むことにつながっているのではなかろうか。妄想分裂ポジションでも、破壊性を誘導する悪の働きがみられる。さらに Klein(1957/1996) は、死の本能のもつ破壊性が最も純粋な形態での表れたものとして、羨望を挙げている。羨望は、自分以外が望ましいものを持っていて、それを楽しんでいることへの怒りの感情として表出し、これは乳児期の投影同一化のように悪い対象を攻撃するのではなく、よい対象を憎み破壊することを目指している。しかし、よい対象を破壊すると、よい対象の持つ生命的な力を取り入れられなくなることによって、結果として自己破壊をもたらすこととなる。ここでは、よい対象として性質を持ったものが何かしらの要因で悪の性質を帯び、破壊性が誘導されてしまっている状況とも考えられ、主体が適切に悪を布置し、関係を形成することが重要となってくる。

悪を定位する、と言うと大変なことをしてしまっているようにも感じられるが、我々は比較的簡単に悪を“創り出す”ことができる存在だとも考えられる。例えばいじめなどにおいて、ある集団に属する人々が、その集団の正当性と力を維持するために特定の人を仕立てあげて攻撃することを“スケープゴート”と呼ぶ(廣澤, 2004)。この時、いじめる側は、悪や間違った行

為と同一視でき、その責を負わせ、共同体から追放することのできる人物ないし人々を見つけ出す(Perena, 1986)。こういった現象は、SNS のようなバーチャルな空間でも見られ、日常の様々な場面に蠢いている。集団の力もかなり影響の影響を与えてはいるものの、人間は“疑似悪”とでも呼べるような、破壊性の避雷針となるものを創り出せる力を持っていることは疑いようが無い。そこで創り出された悪はスケープゴートのように、本質的には破壊的ではなく、形骸的なものであることもあり得る。

(4)破壊性を特徴とするパーソナリティと悪

ここまで乳幼児期を中心に、破壊性と悪との関係性が成立する過程について、精神分析の理論に基づき検討してきた。しかし、破壊性と悪との関係性は乳幼児期に限ったものではなく、人間の一生を通して様々な形で現れる。中にはその関係性が崩れ、破壊的なパーソナリティとして表出する場合もある。以下に、その破壊性が特徴的なパーソナリティの在り方の例として、自己愛傾向とサイコパシー、境界性パーソナリティ障害を挙げて、それぞれの悪との関係性について検討する。

①自己愛傾向

成人期にも見られるパーソナリティ特性の中で、自己愛傾向(ナルシシズム)は破壊性と密接に関わるものとして検討されてきた。ここで自己愛傾向は、病的な対象関係に当てはまる状態として、自己への健康な愛情と区別されている。Rosenfeld(1971/1993)は「万能的自己愛対象の強度や持続性が、羨望的な破壊衝動の強度と密接に関連している」とし、自己愛傾向は羨望のような、かなり破壊的な性質と関わりが深いと考えられる。松木(1996)は、自己愛対象関係の特徴としてまず、よい対象への依存の否認が起こり、自己がそのままよい対象であると感じられるようになるとする。このことはよい対象への羨望の感情に対しての防衛となり、同時によい対象を乗っ取ってしまうことで、自分は神のような存在であるという万能感を維持することになる。そうして、抑うつ不安は破壊の悲惨さとともに否認され、破壊の罪悪感が否認されることの裏返しとして、破壊性自体が肯定されてしまうとした。このように、自己愛傾向が破壊性をもたらすという議論は数多く見られる。Fromm(1964/2018)は、人の破壊性を駆り立てるものとして「衰退のシンドローム」を提唱した。そして衰退のシンドロームを形成する要素の一つとして、悪性の自己愛傾向を示している。悪性の自己愛傾向に特徴的なのは、屈服することの無い意志であり、自分の罪悪感と自分の意志とが衝突した際、敗退するのは罪悪感であり、自分の意志が優先されてしまう。そのため、自己の破壊性は、主体の外に向いてしまう。Gabbard(1989)は、自己愛傾向を「厚皮型」と「薄皮型」に分類し、厚皮型は誇大的かつ攻撃的な特徴を持つ。岡野(2017)は、この厚顔無恥な印象を与えるふるまいをする厚皮型の自己愛傾向者について、周囲の状況に鈍感であるが、自身のプライドを傷つけられた際には、強烈な恥の感情を覚えて相手へ破壊性を向けるとしている。ここまで、破壊的傾向を有する自己愛傾向に共通しているのは、その万能感や誇大性といった、自分が神になってしまう感覚である。これは、自身を至上の善として扱っており、周りの自身が違和感もつ事象は全て“善の欠如”として捉えられている状態でもある。河合(1976)が「おのれの心に地獄を見出し得ぬ人は、自ら善人であることを確信し、悪人たちを罰するための地獄をこの世に作ることになる」とい

うように、自己愛者では罪悪感を持つかたちで、悪を内包できない、または否認してしまうという特徴が見られる。ここで悪は、主体にとって善が欠如している周囲に定位されるため、自ずと破壊性の矛先は外に向くと考えられる。

②サイコパシー

サイコパシーという概念は、19世紀初めにフランスの精神科医 Philippe が、「譫妄無き狂気」という言葉を使い、良心の呵責や自制心が全く欠如した行動パターンを説明しようとしたことがその始まりと言われている。サイコパシーは、自己中心的で尊大、操作的かつ衝動的、さらに冷酷で無責任という特徴からなるパーソナリティを持っているとされ(Hare, 1991)、破壊性との関わりも深いと考えられる。犯罪傾向との関連(Cleckley, 1964)や猟奇的な印象などから、一般には持ちえない特殊な心性のようにも感じられるが、最近では脳科学や心理学の分野での研究も進み、サイコパシーをスペクトラム上にある性質で、大なり小なり各々が有しており、職業によっては必要不可欠な能力であるとも考えられている (Dutton, 2012)。

サイコパシーは、自己中心性や衝動的な破壊性などから先ほど述べた自己愛傾向と類似の性質のようにも見えるが、その破壊に至る心的なプロセスについて自己愛傾向と異なる部分も多い。我々は、一般に悪に対して恐怖や不安を喚起される。人は恐怖や不安を感じることで自身を破壊し得るものを事前に回避し、身を守ることができる。しかし、悪にさらされた際の恐怖や不安は決して心地よいものではなく、そのバランスが崩れると人は心的に不調をきたすこととなる。そういった苦しみを回避するためにも、破壊性が上手く流れるシステムが必要となってくる。自己愛傾向の破壊的な在り方は強烈な恥の誘因から他者を悪として定位するプロセスを持ち、その背景には自己の傷つきに対する恐怖や不安があると考えられる。しかしサイコパシーは、恐怖の欠如に大きな特徴があり(Dutton, 2012)、恐怖に対する正常な生理的反応に至りにくい(Hare, 1999)とされ、恐怖や不安が破壊に至る要因とならない点で自己愛傾向との違いが見られる。さらに、サイコパシーは継続的で過度な刺激を求め、危険を顧みないという特徴(Hare, 1991)があり、一步間違えば周囲だけでなく自分も破滅してしまう、自己破壊的な在り方にも繋がる特性と言える。また、Hare はサイコパシーのもたらす破壊的な行為を、安易に快楽を手に入れる目的で行われるとするなど、その破壊性は快—不快の感覚に基づいているようである。ここでは本能的な次元で善悪が規定されており、避雷針となるような悪を定位する意識は乏しい。サイコパシーの破壊的な在り方は、悪という形で対象化されずコントロールされない状態にある、ある種むき出しの破壊性がもたらすものとも考えられる。

③境界性パーソナリティ障害

自己愛傾向やサイコパシー以外にも、破壊性の特異さに特徴づけられるものとして、不安定な対人関係、自傷行為や自殺企図、著しい気分の変動、衝動性の高さ等の特徴がみられる境界性パーソナリティ障害(borderline personality disorder; BPD)があげられる。BPD では、対人関係の中での見捨てられ不安が強く、相手のちょっとした言動に対して「見捨てられる」と感じて過剰に反応してしまう。また、対人関係での認知が極端化しやすく、不安定に揺れ動き、理想化とこき下ろしを繰り返す(小羽, 2009)。Kernberg(1984/1997)は、彼らが体験による苦痛を回避するため「意味やつながりの破壊」を行い、それは治療構造や自分自身にも及ぶものとされる。この「意味やつながりの破壊」は強力な防衛・回避的手段となるが、患者には何も意味のある

もの、大切なものがなくなり、強烈な空虚感に苛まれるという副作用がある。これは、羨望によっていい対象を取り込めなくなる機序に通ずる部分があると考えられる。ここで、BPDにおける悪は非常に不安定なもので、外界の対象は善—悪の間を絶え間なく揺れ動く。また、内省機能も弱いため内界に安定して定位することもできずに、主体の持つ破壊性はコントロールを失っている状態にあると考えられる。BPDは、自己愛傾向やサイコパシーよりも悪を定位する力は強いと考えられるが、その不安定なあり方が主体の破壊性に混乱を来していると考えられる。

自己愛傾向、サイコパシー、境界性人格障害を破壊性と関連が深いとされるパーソナリティ特性として、悪との関係の持ち方について焦点を当てて挙げた。これらのパーソナリティは、誰もが持ちあわせている破壊性が、不当に他者に向けられてしまうなど、その表出の仕方が問題になっており、周囲から悪として認識されやすい。主体に悪を内包することは、他者を主体の持つむき出しの破壊性に曝すことに対する抑えともなる。つまり、我々誰もが悪との安定した関係性が崩れると、破壊的な主体となってしまう可能性がある。

3. 主体としての悪

悪は、主体が生んだ客体としての性質を帯びるものであるとして、その避雷針としての機能や、パーソナリティとの関連について述べてきた。機能としての在り方にだけ注目すると、悪はどこか無機質で機械的な現象のように感じられてしまう。しかし、悪にはそれだけでは説明のつかない生々しく、人間をどこか惹きつけるような、それ自体が主体としての性質を持っている。河合(1997)は、秩序を破壊することが自分にとって利益でもないのに、あるいは損であるとかわかっていながら人間はやってしまうことがあることについて『『悪の誘惑』、『悪の魅力』』ということを考えざるをえない。」としており、Hermannの『デミアン』(1919/2005)を例に挙げて考察している。『デミアン』では、主人公が善と悪を象徴するような2つの世界のうち、混沌とした悪の世界に惹かれていく様子が描かれ、河合は「悪の世界が未知なものを秘め、活力に満ちている」という一方で、『善』の世界の方は平和でいいのだが、あまりにスタティックで、下手すると退屈につながりやすい」面があると考察している。しかしRicoeur, P.が悪について、なぜ存在するべきか言う事ができない、非・当為的存在であると考えたように、悪は本来無いほうが望ましいものとして扱われることが多い。では、悪の魅力や意義は何から来るものだろうか。

(1)創造性の問題

その一つとして、破壊の先にある創造性が考えられる。河合は「われわれが生きている世界はすでに何らかの秩序を持っている。そのなかで何かあらたにつくりだそうとするならば、古いものを破壊する必要がある」と述べ、いかなる創造にもその背後には破壊がつきまとうと考えた。Jungが示した元型の一つであるグレートマザーは、慈しみ育てる母親像であると同時に、呑み込み破壊する象徴でもあるように、創造と破壊はどこか繋がった事象として存在する。これは、原初的な母子関係の中でも重要な働きとなってくる。Winnicott(1971/2015)は、母子関係の変遷について、原初の母性的没頭状態にある赤ん坊は、母親と一体の状態にあり、そのこと

自体にも気付かない状態にあるとしている。この母親の在り方を、「環境としての母親」と呼び、対して乳幼児の対象となって関係を結ぶ母親のことを「対象としての母親」としている。ここで、環境としての母親には抱えること(holding)が求められるが、現実の母親は全ての要求に応答できるわけではなく、「ほどよい(good enough)母親」である。この応答できなかった、いわゆる失敗によって、赤ん坊は母親が自分の思い通りになるわけでないという、万能感の揺らぎを体験する。その後、徐々に万能感から抜け出す、脱錯覚へと進んでいくとしている。ここで、万能感を揺らがせ、母子関係に変化をもたらす要因になったのは失敗であり、赤ん坊にとっての母親の“good”ではない“bad”な部分である。母親の“not good”な部分は、赤ん坊の原初的な悪として存在することとなり、それまで持っていた万能感への破壊性として機能しているとも考えられる。母親は“good enough”であると同時に“bad enough”である必要もあり、時には悪の持つ破壊性が、子どもが独立した主体として立ち上がっていくための契機となる。このプロセスは心理臨床場面でも多く見られるものであり、前川(2010)は心理療法における破壊性が、場合によっては主体を圧倒し、畏怖の念や無力感を抱かせ、変化を生み出す契機となることを示した。また、梅村(2017)は、プレイセラピーの中で、様々な悪がクライエントの未分化な周囲との関係や、何度も立ち還ろうとした融合状態に対する絶対的な分離として作用し、元々の秩序が崩れることで一時的に能力の低下などが見られたものの、後に主体的な世界に開かれていくための契機になったことを示した。このように、破壊性および悪は、創造や変化の可能性を秘めたものであり、その新たな秩序に対する希望という意味での魅力があると考えられる。

(2)能動性の問題

また Cioran(1969/2017)は、善良なるものは創造せず、想像力を欠いているものとして捉えた。Cioran の理論をもとに中村は、想像力を欠いた善に対して、悪は他を魅惑すると同時に他に感染するという二重の特権を持っており、自らを他に伝達する活動力があることを見出した。ここには、魅力を伝達する主体が想定されており、悪の強烈な存在感と動きが前提に考えられている。その上で中村は、「悪は創造の原因として、＜存在の欠如＞ではなく、＜存在の過剰＞である」と考えた。ここで、存在が過剰であるということは、美しく形が整っているわけではなく、しばしば不必要に他者や秩序を侵害することにも繋がると思われる。対象関係論において、良い対象は赤ん坊を受容する働きがあるなど、一般的に善い性質とされるものは受動的であることが多い。一方で、悪い対象は赤ん坊を迫害する能動的なものであり、その存在を強烈に主体に感じさせる。そもそも破壊という概念自体が、何らかの動きを前提としているものであると考えられ、破壊性を中核とする悪はそれ自体がかなり能動的な性質を帯びる。アダムとイヴは、善悪の知識の実を食べたことで、悪のない純粹無垢な状態から脱した。そのことで、様々な苦しみを負うことになったが、同時に神の庇護から離れ、労働し生み出すという、主体的かつ能動的な動きが生じた。また、梅村(2017)の事例の中でも、初め他者と主体的な関わりを持つことが出来なかったクライエントは、悪を象徴する遊びを通して主体性を獲得していった。ここで主体が、外的なものから適切な形で悪を内包していくことは、能動性や“在る”感覚に関わってくとも考えられる。

(3)悪の危険性

悪は、人間にとって不可欠な要素を持ちあわせる重要な概念であることを述べてきた。ここで、悪はまるで善いもののようにも感じられる。しかし悪は、それ自体が成長への契機をもたらす魅力的なものであると同時に、主体に絶望的な破壊をもたらし得る、それ自体が主体をもった生き物のようであり、能動的な現象として捉えられる。岡野(2015)は、解離性同一性障害の人格の表れとして、破壊性を備えている人格部分を「黒幕人格 Shadowy Personality」表現した。悪の所在が主体の内外どちらにあらうと、悪はこの黒幕人格のように一つの別主体として存在し、主体を脅かし得る。そのため我々は悪と、適切な距離を取って関係を築いていく必要がある。しかし、それはそう簡単なことではなく、常に主体や周囲が破壊性に曝される危険がつきまとう。主体と悪の関係は、かなり絶妙なバランスの上に成り立つものと考えられる。

悪はその魅力から誘惑性を持つものであり、主体との関係性を常に乱す力を持っている。それはよく、悪魔のささやきとして象徴され、悪魔の象徴である蛇がイヴに善悪の知識の木の実を食べることを勧めたことも一つの例と言えるだろう。しかし、あまりに悪に接近し、同一化してしまった場合、客体であった悪は主体そのものとなってしまう、悪は悪でなくなってしまう。その時、主体は剥き出しの破壊性を手にすることになる。これは、破壊性に魅入られるサイコパシーの傾向と通ずるところである。悪との距離感が崩れたとき、その主体は周囲からすると悪そのものになってしまう危険性を孕んでいると考えられる。

また、Kast(1978/2002)は、善と悪の対決が描かれるメルヘンをもとに悪の在り方について検討している。その中で、メルヘンは2つの構造に分かれる。1つは、悪との対決を経ることで以前よりも豊かになり、成長が成し遂げられる最も一般的な第一メルヘン構造である。もう1つは、第一構造よりはるかに稀で、悪との対決を経ることに違いはないが、対決が成熟や成長へと通じず、とにかく厄介なことから脱するのに全力を尽くさなければならない第二メルヘン構造である。第二構造において悪とは、もはや人間が関わることができず、ただ離れているしかないほどの破壊的な力を持つものである。このとき、悪をありのままに内包しようとすることは悲劇につながるかもしれない。悪は客体化され認識の対象となったものであると述べたが、その力があまりに強大過ぎ、対峙することでその破壊性にやられてしまった場合、トラウマを抱えるなどの心的な傷つきだけでなく、主体に死がもたらされる可能性もあり得る。悪と対峙するとき、我々は悪との関係に耐え得るかどうかを正確に見極めなければならない。ここで人間は、このような破壊性について無知なままだいることは危険であり、備える必要がある。Riedel(1978/2002)は、「子どもが危機に負けないようになるためには、『秘密に通ずること』、つまり悪へのイニシエーションを必要とする」と述べており、我々が秩序に対する破壊性を悪として認識し、その悪について知っていくことは、自らに迫る破壊性に対して心的に備えることにも繋がると思われる。

4. 悪との出逢い

我々は、自身の成熟のために悪との関係を築いていく必要がある。しかし、直接的な悪との遭遇には主体が破壊される危険が伴う。悪と出逢うためには、ある程度安全に悪と交流できる第三の場が必要となってくる。第三の場は、現実の場所という意味ではなく、悪と主体の間に

存在する媒体となるものである。

(1)日常における第三の場

こういった第三の場は、特別なものではなく我々の身近に数多く存在している。例えば、テレビや映画などのメディアや、先に述べたメルヘンやマンガ、小説などの文学作品などが挙げられる。特に、善と悪の戦いがモチーフになる創作物は神話の時代から絶えることなく、我々はそのような創作物を通して様々な悪との接触を図ることが出来る。メルヘンは、その多くにさまざまな形で悪が登場し、悪との出逢いという危機的場面について語っている。その中で、悪を上回る力で対抗する術を学んでいくことが出来るものである。ここで我々は、あくまで観衆としての立場に過ぎないが、第三の場としてのゲームにおいては、メディアや文学作品とは違った形で、悪が体験されるかもしれない。最近では、ゲーム産業における技術の進歩が著しく、よりリアリティの増したものが登場している。バーチャル空間の中で、主体の操作がダイレクトに伝わるため同一化することが容易になり、比較的直接性の高いものとして、かつ安全に悪を体験することが出来るものであろう。ただ、このような形で悪を体験することが、実際に暴力行為につながるという説を唱える者も多い。草薙(2018)は、2005年に起こった佐世保小六女児殺害事件について、加害者の当時11歳であった女子児童Bが、ホラー小説や残酷なシーンがある映画を好み、その影響を受けて、虚実が入り乱れ、感覚が麻痺し、映像の死と現実の死を区別できなくなっていたと考察している。しかし精神科医療において香山(1996)は、ゲームの親しみやすさとゲームに没頭することによる世界への強い参加の感覚が、心を癒す機能を持つとしている。このようにゲームについては、心理的な要因に対して意見が分かれるところでもある。ただ、概して言えることはそうした悪との関係が崩れないように主体が在ることが重要なのであって、誰もが虚実が入り乱れた状態に陥るわけではない。初めに述べたように、犯罪や非行などの実際に破壊行為に至ることと内的世界で悪と関わることは、区別して考えるべきであり、より複雑な問題が絡み合っていると考えられる。

(2)心理臨床場面における第三の場

心理臨床場面において、多くのクライアントが持つ苦悩の背景には、何らかの悪や破壊性の問題が関わってくる。そこで、セラピストとクライアントは様々な形で悪と対峙していくことが求められるが、その多くが第三の場において見られる。第三の場に通ずるものとして、Winnicott(1971/2015)は「主観的なものと客観的に知覚される者との間」としての中間領域の概念を提唱したが、これは自他の分離の移行期のもので消滅してしまうのではなく、ファンタジーや芸術として第三のものを開くものであるとされる。河合(2013)は、心理療法が「クライアントとセラピストとの間にイメージという中間領域における対象を置く構造をもっている」と述べ、千葉(2018)はイメージを「個人の内界で生まれ、そのものに自律性があり、それを体験する人にさまざまな感覚や感情を引き起こすもの」としている。イメージはこれまで述べてきた悪と性質が重なる部分が多く、客体としての性質と主体としての性質を兼ね備えるものであると考えられる。河合は、そのイメージが表れる中間領域の代表的なものとして、夢や絵画、箱庭を挙げている。心理療法の中で悪と出逢っていく際、こういった中間領域で悪のイメージ

体験をしていくことが、悪の持つ肯定的側面を安全に取り入れていくための助けになると考えられる。梅村(2017)の事例では、箱庭のアイテムを使った遊びという中間領域の中で正義と悪の対立が生じており、その中でクライアントは徐々に悪のイメージ体験を重ねていく。前川(1997)の事例では、夢におけるグロテスクな「醜なるもの」の出現によって、分離や主体性の確立などの心的作業が促進されたとしている。これは、悪の持つ関係や秩序を解体する力がイメージを通じて、主体を破壊しない形で作用しているようである。主体の機能を損なわない破壊の先には、創造の可能性がある、クライアントの主体を立ち上がらせる刺激としても機能すると考えられる。また高見(2013)の事例では、性犯罪被害を受けたクライアントとの面接過程において、描画の中にクライアントにとっての悪のイメージとも言える性的なシンボルが登場する。後にクライアントの描画には、悪から主体を守るシンボルが登場し、主体は徐々に癒しへと向かっていく。河合(2000)は、心的な外傷体験から解放されることについて「むしろ逆説的に、傷を受け、犠牲となった人が自ら主体的にもう一度傷つけ、犠牲に捧げることで治療の道は開ける」としている。この事例では、改めて悪と関係を築き、悪を直接的なものではなく、描画を通したイメージとして体験していくことが、主体の安全を確保しつつ癒していくことに繋がったと考えられる。

夢や箱庭、描画などを通した悪のイメージ体験について述べてきたが、心理療法の過程で治療者自身が、悪のイメージとして体験されることもあり得る。その際、治療者はクライアントを破壊つくす直接的な悪として存在してはならない。しかし、クライアントにとって安全な“bad enough”であることは、クライアントが治療者から適切に悪を取り入れていくための一助であるかもしれない。

5. おわりに

「認識にとっては、〈悪〉はまことに手ごわい相手なのである」と、中村(1994)が述べるように、悪そのものはこれまで理論として扱われることはほとんど無かった。悪は文化、時代背景、パーソナリティなど様々な要因によって、その在り方を変えるそれ自体が生き物のような存在であり、その全容を捉えるのは非常に難しい概念である。しかし、心理臨床場面のみならず、我々の日常生活にも密接に関わり、絶えず影響を与えるものである以上、その本質に迫る営みをし続けることが重要であろう。臨床心理学において悪が扱われるとき、その多くが破壊性と区別されずに語られることが多く、悪の構造や成り立ちに触れられることはほとんどなかった。本論では、宗教や哲学を参考にしつつ、悪自体の持つ客体性と主体性という観点から検討し、破壊性との関係性の中で悪を捉えようと試みた点で、新奇性があると考えられる。今後は犯罪・非行や集団における悪の働きについても詳しく検討し、より多角的に悪について検討していきたい。

引用文献

- 千葉友里香 (2018). 箱庭療法と心の変容—イメージと関係性の視点から. 創元社.
Cioran, E.M. (1969). *Le mauvais Demiurge*. 金井裕(訳) (2017). 悪しき造物主. 法政大学出版局.
Cleckley, H. (1964). *The mask of sanity: An attempt to clarify some issues about the so-called*

- psychopathic personality*, 4th. Mosby.
- Dutton, K. (2012). *The Wisdom of Psychopaths*. 小林由香利(訳)(2013). サイコパス 秘められた能力. NHK 出版.
- Freud, S. (1920). *Jenseits des Lustprinzips*. 須藤訓任 (訳). 快原理の彼岸.(2006). 新宮一成・鷺田清一・道籐泰三・高田珠樹・須藤訓任 (編). フロイト全集 17. 岩波書店.
- Fromm, E. (1964). *The Heart of man Its genius for good and evil*. 渡会圭子(訳) (2018). 悪について. 筑摩書房.
- Gabbard, G.O. (1989). *Two Subtypes of Narcissistic Personality Disorder*. Bulletin of the Menninger Clinic, 53.
- Hare, D.R. (1991). *The Hare Psychopathy Checklist-Revised(PCL-R)*. Multi-Health Systems.
- Hare, D.R. (1999). *Without conscience*. 小林宏明 (訳)(2000). 診断名サイコパス. ハヤカワ文庫.
- Hermann, H. (1919). *Demian: Die Geschichte von Emil Sinclairs Jugend*. 日本ヘルマン・ヘッセ友の会・研究会(編)(2005). ヘルマン・ヘッセ全集 10 デーミアン・戯曲の試み. 臨川書店
- 廣澤愛子 (2004). ‘スケープゴート’に関する臨床学的一考察. 愛知教育大学教育実践総合センター紀要, 7, 319-327.
- Jacoby, M. & Kast, V. & Riedel, I. (1978). *Das Bose im Marchen*. Bonz Verlag GmbH. 山中康裕(監訳)(2002). 悪とメルヘン 私たちを成長させる<悪>とは?. 新曜社.
- 加藤敏 (2002). 主体. 小此木啓吾 (編). 精神分析辞典. 岩崎学術出版社.
- 河合隼雄 (1976). 影の現象学. 思索社.
- 河合隼雄 (1997). 子どもと悪. 岩波書店.
- 河合俊雄 (2000). 心的外傷理論の批判的検討. 河合隼雄・空井健三・山中康裕(編). 心的外傷の臨床 臨床心理学体系 17. 金子書房. 24-56.
- 河合俊雄 (2013). ユング派心理療法. ミネルヴァ書房.
- 香山リカ (1996). テレビゲームと癒し. 岩波書店.
- Klein, M. (1957). *Envy and Gratitude*. 小此木啓吾・岩崎徹也 (編訳)(1996). メラニークライン著作集⑤ 羨望と感謝. 誠信書房.
- 小羽俊士 (2009). 境界性パーソナリティ障害 疾患の全体像と精神療法の基礎知識. みすず書房.
- Kohut, H. (1977). *The analysis of the self*. New York: International Universities Press. 水野信義・笠原嘉 (訳)(1994). 自己の分析. みすず書房.
- 草薙厚子 (2018). となりの少年少女 A. 河出書房新社.
- 前川美行 (1997). 夢に現れる“醜なるもの”のもつ意味. 心理臨床学研究, 15(1), 24-35.
- 前川美行 (2010). 心理療法における偶発事——破壊性と力. 創元社.
- 松木邦裕 (1996). 対象関係論を学ぶ. 岩崎学術出版.
- 中村雄二郎 (1994). 悪の哲学ノート. 岩波書店.
- 岡野憲一郎 (2015). 精神分析新時代 ト라우マ・解離・脳と「新無意識」から問い直す. 岩崎学術出版.
- 岡野憲一郎 (2017). 自己愛な人たち. 創元社.

- Perera, S. B. (1986). *The Scapegoat Complex-Toward a Mythology of Shadow and Guilt*. Inner City Books, Tront. 河東仁・田口秀明(訳),(1992). スケープゴート・コンプレックス—影と罪の神話学への試み—. 大明堂.
- Rosenfeld, H. (1971). *A clinical approach to the psychoanalytical theory of the life and death instincts: an investigation into the aggressive aspects of narcissism*. International Journal of Psycho-Analysis, 59, 215-21. 松木邦弘(監訳). (1993). メラニー・クライントゥデイ② 思索と人格病理. 岩崎学術出版.
- Spinoza, B. (1677). *ETHICA ORDINE GEOMETRICO DEMONSTRATA*. 畠中尚志(訳). (1951) エチカ —倫理学— (上). 岩波書店.
- Spinoza, B. (1677). *ETHICA ORDINE GEOMETRICO DEMONSTRATA*. 畠中尚志(訳). (1951) エチカ —倫理学— (下). 岩波書店.
- 高見友里. (2013). 性犯罪被害を受けた小学生女児の描画・箱庭表現—火の表現による再生. 河合俊雄(編著). ユング派心理療法. ミネルヴァ書房. 130-145.
- 梅村高太郎・長谷川千紘・畑中千紘・田中康裕. (2017). プレイセラピーが発達障害にもたらす効果の事例的・実証的検討 融合・分離の契機と破壊・対立を生み出す悪の意義. 箱庭療法学研究, 30(1), 3-16.
- Winnicott, D. W. (1956). *The Antisocial Tendency in Through Paediatrics to Psychoanalysis*. 西村良二(監訳).(2005). ウィニコット著作集 第2巻 愛情剥奪と非行. 岩崎学術出版社.
- Winnicott, D. W. (1971). *Playing and Reality*. London: Tavistock Publications. 橋本政雄・大矢泰士(訳). (2015). 改訳 遊ぶことと現実. 岩崎学術出版.

(臨床心理学コース 博士後期課程 1 回生)

(受稿 2019 年 8 月 30 日、改稿 2019 年 11 月 10 日、受理 2019 年 12 月 13 日)

“悪”はどのように在るのか

—主体・客体の観点を中心に—

長谷 雄太

“悪”は茫漠とした概念であり、人々はそれを曖昧なまま把握していることが多い。本稿では、宗教や哲学の知見も参考にし、臨床心理学の理論から悪の性質や構造について検討した。ここで、悪は関係の破壊性が客体化されたものであると同時に、創造性や能動性からくる魅力を持ち、主体的な在り方をするものであった。また、破壊性が問題となるパーソナリティでは、悪の定位される状況や、関係の持ち方が特徴的であり、悪と関係性を築き、適切に内包していくことの重要性について考察した。こうした関係性を安全に築いていくために、日常生活におけるメディアや創作物、心理臨床において主体のイメージが表現される夢・描画・箱庭などが第三の場として機能していくことが重要となり、その様相についても概観した。悪には危険が伴うが、成長の契機となるもので、臨床実践の場でも“bad enough”で在り、常に悪の本質に迫る営みを続けていく重要性が示唆された。

How Does “Evil” Exist?: A review from the Viewpoints of Subject and Object

NAGATANI Yuta

Many people have a vague perception of “evil” because it is an obscure concept. This article reviews the character and structure of evil from the perspective of clinical psychology, and relevant studies, such as religion and philosophy. In this perspective, evil is an objectification of destructiveness of relation, and is an attractive subject with creativity and activity. The characteristics of destructive personalities are evil’s orientation and relationships. This suggests the importance of establishing a political relationship with evil and involving evil’s agencies. This article also reviews the usefulness of tertiary spaces for keeping a safe relationship with evil, such as media and creation in everyday life and dream, drawing, and sandplay in psychotherapy. This article suggests that we have to be “bad enough” in psychotherapy because evil has a chance of maturation although it is dangerous, and we have to keep studying evil.

キーワード：悪，破壊性，主体，客体

Keywords: evil, destruction, subject, object